



2023. 3. 10 発行 ニュースレター第307号

〒262-0019 千葉市花見川区朝日ヶ丘 5-24-2

TEL. 090-7941-7655 FAX: 043-483-0027 代表：小西 由希子

E-mail: yatsudasukisuki@gmail.com , Home Page: <http://www.ceic.info/>

**写真等無断転載禁止**

2023年2月11日、千葉市文化センター 5階セミナー室で、シンポジウム「古くて新しい社会システム「コモンズに学ぶ、これからの地域再生」」が実施されました。このシンポジウムは、ちば環境情報センターの活動場所である千葉市緑区下大和田の開発計画をきっかけに、多くの方とともに地域の自然環境について考える機会を持つために開催されました。当日は会場に約100名、オンラインで500名以上の参加者があり、地域に暮らす人々や、さらには次世代も含めた「共有財産＝コモンズ」としての考え方が議論されました。

当日参加したちば環境情報センター会員の方から報告がありましたので掲載いたします。

## 「コモンズに学ぶ、これからの地域再生」に参加報告

千葉市緑区 田崎 稔

2023年2月11日に千葉市文化センターで開催された、シンポジウム「古くて新しい社会システム「コモンズに学ぶ、これからの地域再生」」に参加しました。きっかけは\*YPP活動地にほど近い山林160haに開発の話があるとの事で『ムムっ！これは他人事ではないぞ』と思い、参加をしました。



千葉市文化センター会場では約100人が集まった

当日はちば環境情報センター代表の小西さん、地球守代表の高田さん、コモンフォレストジャパン代表の坂田さんの講演後、3名を加えたパネルディスカッションが行われました。開発の概要にも驚かされましたが、今回の表題にある【コモンズ】という言葉を知りました。日本語に訳すと入会地【(いりあいち)村や部落などの村落共同体(入会集団)が総有する又は共同利用が認められた土地】との事で、コモンズ＝共有財産＝自然環境の認識です。

60年くらい前は皆が必要な共有地であっても、現在必要とされなければただの土地となり、売却されて簡単な話だと森林を切り開きソーラーパネル、建設ストックヤード、スクラップ置き場となり、その

土地で長く続いてきた生命の循環を閉ざしてしまうことがあります。私は子どもの未来に『自然』が不可欠だと日々感じておりますが、『土地を生まれながらに背負って生きてきた地主さんの気持ちに寄り添って欲しい』と普段は不動産を生業にしている株式会社ものくり商事代表の早坂さんの話を聴いて、『確かにな〜』と思うところも。

2024年4月からスタートする【相続土地国庫帰属制度】・【相続問題】・【千葉市産業用地整備方針】・【先祖の土地を守れない後ろめたさ】・【管理できない森問題】など様々な要因があり、一筋縄では解決しない問題なのだなど実感しました。が、私としては自然環境＝共有財産＝コモンズを、今一度皆で考え『人も自然の一部である』事に立ち返り皆の気持ちも含めた【共有財産＝自然環境】を未来に残していかなければと改めて思い抱いたシンポジウムでありました。以上報告となります。

\*YPP：谷津田プレーランドプロジェクト



後半のパネルディスカッション、パネラー：左から高田宏臣、小西由希子、坂田昌子、早坂拓紀、田島俊介、右端はコーディネーター：岡野春樹(敬称略)

## シンポジウムに参加して

千葉市花見川区 伊藤 和華子

2月11日、「コモンズに学ぶ、これからの地域再生」シンポジウムに参加しました。

基調講演では、ちば環境情報センターの小西さんより、下大和田谷津田の紹介とそこでの保全活動、今持ち上がっている開発計画について。

NPO 法人地球守の高田さんより、大昔から人々の生活を守ってきた里地里山や森のこと、各地で進む開発とそれに伴う生物多様性の損失、災害などの問題について。



基調講演は、小西由希子ちば環境情報センター代表による「知られざる千葉の宝・谷津田」

コモンフォレストジャパンの坂田さんより、地域の里山や自然を、そこに住まう人、関わる人々の共有財産として共同管理するコモンズという考え方について、などのお話がありました。

私は昨年、初めて下大和田谷津田でのお米作り体験に家族と参加させていただきました。谷津田に行くたびに、様々な生き物や植物に出会い、お米がどんなふうにつくられるかということも教えていただきました。息子は毎回、大好きな生き物探しに夢中で、とても楽しく貴重な体験でした。

開発計画の話聞いた時、谷津田の環境と生態系を守ろうとずっと残されてきたあの場所をなぜ今、開発業者の手に委ねてしまおうとするのだろうと思いました。

そこで何百年も昔から育まれてきた生態系は、一度壊してしまったらもう二度と元に戻すことはできないし、絶滅の心配が加速する生物も出てくるでしょう。高田さんのお話にあったように山や森や谷を潰したら水の行き場がなくなり、泥が堆積し、将来的に大きな災害や水害に繋がるかもしれません。

けれどもパネルディスカッションの際に、不動産会社の早坂さんから、土地を手放そうとする地主さんの苦悩にも寄り添う必要があるのだというお話がありました。生まれた時から背負っているもの、代々受け継がれてきた広い土地を相続し守っていくということに、私には想像もつかないような様々なプレッシャーや負担があるのですね。

早坂さんは、仲介となる不動産業の立場から、色々と思うところをお話してくださいました。

自然を守ろうとする立場、土地所有者、不動産業者、開発する側、それぞれに大義名分や立場があるものの、皆心をもつ人と人。

肩書きではなく個人としての対話が必要なのだと考えさせられました。

小西さんが司会の方に尋ねられて、穏やかな口調で、しかし長年活動を続けてこられた下大和田谷津田への溢れるような想いや強いお気持ちを話されるのを聞いて、胸が熱くなりました。

昔、日本人は自然の恵みを利用し、自然と共に日常を送っていた。自然が人々の生活を支えていたので、人も自然を尊びながら利用、管理していた。共に生きる隣人への配慮としても、汚さない、取りすぎない、自然の摂理を理解し妨げないよう利用するということがあたり前にできていて、それこそが持続可能と言える社会だったのに、資本主義であらゆる物事の所有権が主張され、効率化が重視される現代、人と自然は離れすぎてしまって、それが結局のところ私たちの生命や生活を徐々に脅かしているのかもしれない。



別会場では、各団体による活動紹介が行われた

何の飾り気もなくとも、木々の緑や川のながれ、揺れる稲穂、草花やそこに息づく生命を美しいと感じ、生き物の鳴き声や風や土の、緑の匂いを心地よいと感じる。人間も自然の一部なのだから、誰しもが多かれ少なかれそのような感覚を持っているはずで、私たちはその感覚を忘れてはいけないのだと思います。

日本の豊かな里山を少しでも良い形で次世代に繋いでゆくために、先人の知恵に学びながら自然の声に耳を傾けながら、現代に生きる私達ができることって何かと、自分にもできることを学び、行動したいと思いました。

# お米にまつわるミャンマーの話 第7回

## ～ミャンマー・スパゲティー「ナンジートウツ」と メイドさん一家との思い出～ ②

千葉市若葉区 岩沢 久美子

ドー・プリーは物静かでおっとりしたとても優しい性格で、うちの娘もドー・プリーのことが大好きでした。そして彼女もまた、その穏やかな笑顔からは想像つかない苦勞をした経歴がありました。ドー・プリーには歳の離れた二人の娘さんがいます。一人目は最初のメイドさんですが、18歳離れた下の娘さんがいますが、下の娘さんが生まれて間もなく、旦那さんを病気で亡くしてしまいました。そのため、子供たちを育てるためにシンガポールに長く出稼ぎに出た仕送りで二人の娘さんを育てたそうです。下の娘さんも働ける年になり、子育てもひと段落してシンガポールでの出稼ぎを終えて、隠居してのんびり余生を過ごすことになっていたそうです。ところが、働き者の性から家でじっとしていることができず仕事を探していたところ、タイミング良く我が家で人手がいったので来てくれたのでした。



ミャンマー・スパゲティー「ナンジートウツ」

ドー・プリーとの思い出の一つにこんなことがありました。彼女は、苦勞した経験からか、長い軍政の影響なのか分かりませんが、食べ物を捨てるのを極端に嫌がっていました。ある日などは、娘が食べ

残した朝ごはんのオートミールまで「もったいないから」と無理して食べていたと後からパオパオから聞かされました。ミャンマー人は皆、食べ物を大切にして、ご飯粒まで残さず食べます。しかし、娘が残したミャンマー人には馴染みのないオートミールまで食べていたという話を聞いて、申し訳ない気持ちと同時に、幼い頃、自分もご飯を残すと強く叱られたことを思い出して、なんともいえない懐かしい気持ちになったのを覚えています。飽食の時代と言われる今の世の中で、自分も含めて皆、食べ物を捨てることへの罪悪感をいつの間にか薄れてしまっているのではないかと、はっと気がつかされる一件でした。

ところで、我が家にはもう一人の使用人である運転手がいますが、彼は最初のメイドさんの旦那さん、ドー・プリーの義理の息子にあたります。家族のうち3人が我が家で働いてくれたこともあり、娘さんである最初のメイドさんも仕事を辞めた後も時折娘へのお土産を持って遊びに来てくれたり、クリスマスには贈り物を渡しあつたりと、家族ぐるみのおつきあいがありました。

時には、ドー・プリー達が住む家にお呼ばれをすることもありました。お呼ばれの時は、大抵私の好物のナンジートウツを作ってくれていたのです。お店で食べるナンジートウツも美味しいのですが、家庭で作られるナンジートウツは、化学調味料などの余計な味がせず、薬味などもふんだんに使われていて、本当に美味しいのです。優しく丁寧な味付けは、間違いなくドー・プリーやその家族の心を良く表していました。今でも、ドー・プリーのナンジートウツはミャンマーでも一番のご馳走です。

## 新浜の話61 ～PNファンド（プロ・ナトゥーラ・ファンド）～

千葉県野鳥の会 市川市 蓮尾 純子

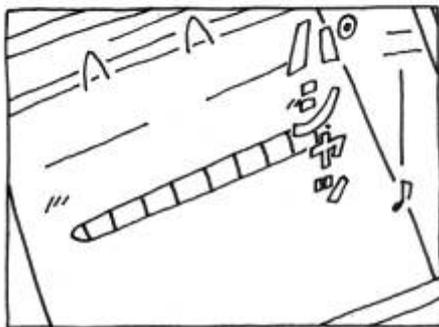
「みなと池」造成よりも前の1992年、日本自然保護協会によるPNファンドから160万円の助成金をいただいたことがあります。この助成金で、初めて干潟の改良実験をしました。

水、とにかく淡水が欲しいというのは当初からの希望です。トヨタ財団の研究コンクールもはじめからこのテーマに沿ったものでした。淡水源を確保し、

導入するだけでよいのですから、ある意味対処もしやすいものです。決して楽ではなく、問題をきれいに解決できたわけではありませんが。一方、同じくはじめからのテーマである干潟の改良は、はるかに厄介でした。東京湾の半分から3分の1しかない潮の上下を増すには水門の拡大が必要、青潮の原因ともなる深みの存在、シルト中心の細かすぎる泥質、

# スロマン 作: つま あまひ

26



つまあまひのウェブサイト

21世紀絵コロッジ~ <http://www.21eco.net>

と、どれをとっても莫大な予算や手続きが必要で、とても手がつけられないと思っていました。しかし、その中でも表面 80 cmに及ぶシルト泥については、粒の荒い砂を表面に入れて、底生動物が住みやすい環境を作ることができるかも知れないと考えました。

底生動物が多く利用するのは表面から 20 cmくらい。もっと深く穴を掘る大型のカニ類や、1.5mもの深さにもぐるニホンズナモグリなどもいるのですが、大多数は 20~30 cmの深さにいます。潮干狩りでたくさん貝がとれるわけです（潮干狩り場では他所から運んだ貝をまくので、なおさら）。だから、20 cm程度の底泥質を変えることができれば、そこに住む生物に役に立つのではないかと。

助成金の 160 万円で、山砂と海砂をトラック 1 台分ずつ購入。たしか 2 立方mずつ、4 トン近くではなかったかと。これをシルト質の干潟「うらぎく湿地」に運び、5 m四方ほどの試験地を二つ作ります。このための人件費も同ファンドの助成金から。山砂は酸性に傾くので干潟の改良には不向きとされていますが、価格がずっと安いので（海砂の半額以下）、比較したいと考えました。

うらぎく湿地は軟泥地。砂を積んだ一輪車はそのままでは通れません。足場板で通路を確保したり、一部は野鳥病院から出た使用済みの敷き藁をまいて、泥をかためました。このたいへんな作業をほとんど独力でやりとげてくれたのは大黒柱 1 号の石川一樹さん。日給のアルバイトとはいえ、創意工夫と体力勝負のきつい作業でした。はじめはリヤカーを使って私も手伝ったのですが、砂をおろしてもらった道路際からだとも短い上り坂が何か所もあって、一度などはどうがんばっても坂道が上がれず、にっちもさっちも行かなくなって、ちょうど都合よく姿を見せてくれたボランティアの和久本仁さんから後光がさして見えたものです。結局、坦々と一輪車で運ぶことに。

試験地には翌年の春、早くも砂泥地を好むチゴガニが住みつききました。シルト泥の中にはわずかに 5 ミリほどのストレブロスピオという小型のゴカイが住んでおり、寒天質の棲管を作って暮らします。この小型ゴカイを食べる鳥は多くはなく、見た目にはよさそうな干潟に見えるウラギク湿地に鳥があまり入らないことも納得できました。もっと大型のゴカイやチゴガニなどが試験地に定着してくれれば、鳥にとってもよい影響がありそう。山砂と海砂の差はほとんど見られませんでした。

ただし、この計画をみなで相談した時に嘉彪がありがたくない予想を。砂を入れても、重く大きな砂粒は沈んで、結局上をシルトに覆われてしまうのではないかと。残念なことにこの予想は当たっていたらしく、造成から 30 年を経過した今では、アシの進出もあり、小さな試験地は他の場所とこれといった見分けはつかなくなりました。それでも、これまで手がつけられずにいた干潟の改良に一步踏み出せたことで、PNファンドと石川一樹さんに深く感謝しています。

【発送お手伝いのお願い】ニュースレター2023年 4月号（第308号）の発送を 4月 7日（金）10時から千葉市民活動支援センター会議室（千葉市中央区中央2-5-1 千葉中央ツインビル2号館9階）にて おこなう予定です。ただし新型コロナウイルス感染の拡大状況によっては中止する場合がありますので、お手伝いいただける方は事務局（小西 090-7941-7655）までご連絡ください。

## 会費納入のお願い

2023 年度の会費納入をお願い致します。同封の振込用紙をご利用ください。ゆうちょ銀行の口座をお持ちの方は、ちば環境情報センターの口座に直接送金できます。口座番号は、

『特定非営利活動法人 ちば環境情報センター』

記号10560 番号55564681』です。

年会費：正会員 5,000 円、一般 2,000 円、学生 1,000 円

編集後記：今年の下大和田谷津田のニホンアカガエルの卵塊調査がほぼ終了しました。卵塊数は合計で201個。かつて記録したことがないくらいの少なさです。原因としては、気候やアライグマ、イノシシなどの影響も考えられますが、はっきりとはわかりません。我孫子などからも少ないことが報告されていますが、皆さんの地域の状況はいかがでしょうか。 mud-skipper

(カット:こまちだ たまお)



## 【谷津田・季節のたより】 2023年 2月

＜下大和田町＞ 報告：田村光範

暖かい日と田んぼが凍るような寒い日が交互にあり、少しずつ春の足音が近づいてきました。

今年は雨が少なく、なかなかアカガエルの産卵が始まりませんでした。2月中旬に若干の雨が降り、ようやく始まりました。ウグイスのさえずりも聞こえるようになってきました。

田んぼに設置しているカメラには、タヌキやイタチ、野うさぎ、アライグマ、さらには全国的にかなり数が少なくなっているキツネ？らしい動物も写っていました。

谷津田は、日中では見かけることのない動物達の貴重な生息地になっているんですね。

＜小山町＞ 報告：たんぼぼ

2/2 先月半ばより度々飛来していた新顔さん、クサシギと判明。

2/13 昨夜より寒さ緩み、雨の朝。アカガエル初産卵。

2/17 オオイヌフグりが青紫の絨毯のようにたくさん咲く。

2/23 ウグイスの囀り、小山初鳴き。コジュケイの群れ。イノシシ活動再開の足跡。

2/27 前日より冷え込み、田んぼ凍り、霜柱も。それでも鳥たちは活発。シロハラ、アカハラ、コジュケイの群れ、ウグイスの囀り。

## 【イベントのお知らせ】 主催：NPO法人 ちば環境情報センター

連絡先：小西 TEL. 090-7941-7655 , E-mail : yatsudasukisuki@gmail.com

### ＜下大和田谷津田＞

#### ・第287回 下大和田YPP「米づくり説明会・野草を食べる会」

日時：2023年 3月18日（土） 9時45分～12時 雨天中止

場所：下大和田 わいわい広場

内容：野草を食べる会と平行して、2023年度の谷津田の米づくり説明会を実施します。

持ち物：動きやすい服装、長靴、お弁当、飲み物、敷物

参加費：300円（小学生以上）

#### ・森と水辺の手入れ

日時：2023年 3月19日（日） 9時45分～12時 雨天中止

内容：畦の補修作業など

持ち物：長袖長ズボンの服装、軍手、帽子、飲み物、午後まで活動する方は弁当、敷物

参加費：無料

#### ・第288回 YPP「苗床作り・種まき」

日時：2023年 3月25日（土） 9時45分～14時 雨天決行

内容：田んぼに苗床を作って、3月18日に配布した種籾をみんなで播きます。

持ち物：マスク着用、長袖長ズボンの服装、田んぼ用長靴、帽子、ゴミ袋、飲み物、弁当、敷物。

参加費：米づくり年間参加者以外300円（小学生以上）

#### ・第279回 下大和田谷津田観察会とゴミ拾い

日時：2023年 4月 2日（日） 9時45分～12時 雨天決行

内容：春の花の季節到来です。ウグイスの囀りを聞きながら谷津を巡ります。

持ち物：筆記用具、飲み物、長袖長ズボンの服装、長靴（通常の）、帽子、あれば双眼鏡、ゴミ袋

参加費：100円（米づくり年間参加者は無料）

### ＜小山町谷津田＞

#### ・第213回、214回 小山町 YPP「苗代作り」

小学校田んぼおよび YPP 小山の苗代作りを行います。※小山での稲の生長の都合、苗代作りの作業日を接近して設定しているため、2期分をまとめて告知いたします。

日時：2023年 3月25日（土）、4月 1日（土） 10時00分～ ☆小雨実施。

場所：りんどう広場

※ 一般の方の参加も若干名受付ます。

参加ご希望の方は、赤シャツ親父（e-mail: tomizo\_i@nifty.com）までご連絡下さい。

